

尚書禪門本〔複製〕

曾祿好忘集

伝為氏筆

古典文庫

尚書禪門本〔複製〕

忘稱好忘集

伝為氏筆

古典文庫

古典文庫 別冊

昭和四十年十一月五日 印刷發行

非売品

集忠好禰曾
(複製)

東京都北区西ヶ原三ノ三四

編集兼
發行者 吉 田 幸 一

東京都文京区関口水道町二七

印刷者 松本印刷 KK

發行所

東京都(王子局区内)
北区西ヶ原三ノ三四

古典文庫

振替口座東京一四五九七番

解題

曾禰好忠集 偽二条為氏筆本 一帖

鎌倉時代中期写。胡蝶装、三〇×七・五糎。

表紙は墨流し模様を染出した厚手の鳥の子、原装。見返しは金砂子。外題も内題もない。箱書に後人の筆蹟で、曾禰好忠之集「伝為氏筆」とあるが、書風はむしろ為家の筆に近いもので、書写年代は弘安前後のものと思われることができる。本文料紙は上質の鳥の子に、淡く雲母引き、一面十行、和歌一首二行書である。

紙数は、第一、三、四折各九枚、第二折十枚で、七十四丁。内、首に白紙一丁、尾に二丁ある。墨付七十一丁。卷末に本文と同筆で、

以右尚書禪門本書写畢

自一校了、本不審千萬々々

とある。右尚書禪門とは右大弁入道真観、即ち葉室光俊である。従って本書は、光俊の知人がこれを借りて書写したものであらう。書写時代もほゞ同じ頃である。

曾丹集の伝本としては最古本で、同系統の写本には、官内庁書陵部蔵の南北朝写本、池田博士蔵の室町末頃写本などがある。内容についてみると、歌数や順序などは流布本と同じであるが、歌および詞書においてはかなりの異同がある。本書の系統本は巻初の序の冒頭が「あらかね」となっているが、流布本は「あらたま」で始まってゐるなど、枚挙に遑ない。（『国書聚影』より）

本書の刊行は、所蔵者呉文炳先生の御厚意によるものである。先生に対して満腔の謝意を表する次第である。

あゝかぬがごとく日さすをひき入はるす
此袖のふり袖となりふもろのしほきつとれた
かはのしほしやうらまきかたはくしとるを
まじつふひよきまはは風まのきまらるは
かやはせいのまのしほはうまをいじりぬけ
くわをまげを我とあはれまうにま
もしりあやう成見はあはれとわらふ
らめとくはあしこはるわはくわらわ
まづあまきまきかのこころをさしてまはる

雨下りし志の葉乃にづる秋の世のふへ月
あささくさく夏の本はあはれうりこさ
曉をたにさるるうらなににわかれとやの
はまてしなまどしむらなぬましむら
人しなまたにまのこまににわ浪りす
すつらあまぬしわはれ人しなま

春の草子見

たしむるは河のくまはるふりたねり
は来いりふもさあふふり
あはふも山はげくくさけあ
ろふとけふ水やなまはる
なまふらふいよあのかりうあし
もろのふたつあふふふふ
ふあふはやけふふふふふ
あふふふふふふふふふふ

野村胡堂の書
かきつりてはねえまのり
けいやくふりてはねえまのり
かきつりてはねえまのり
かきつりてはねえまのり
かきつりてはねえまのり
かきつりてはねえまのり
かきつりてはねえまのり
かきつりてはねえまのり
かきつりてはねえまのり

心身の井る。いりぬらなり。すまじき
うらみはくはひにあはれはるなり
正月十一
かたきしれぬらなり。おのり
やまのうらみはくはひにあはれはるなり
すまじきあはれはるなり。おのり
いづこもはくはひにあはれはるなり
かたきしれぬらなり。おのり
いづこもはくはひにあはれはるなり
かたきしれぬらなり。おのり

もろきにはりしう。やま。
あつし。先林の野でく。せう。
こころ。も。は。の。れ。井。さ。る。ん。
く。あ。り。る。も。の。や。ま。ん。い。す。ま。り。
い。れ。の。み。え。し。た。い。の。み。ま。ん。か。
う。う。す。も。い。ん。ん。ん。ん。ん。ん。ん。ん。
お。し。や。も。れ。い。う。ん。ん。ん。の。あ。く。
お。き。り。つ。い。う。の。き。う。ん。ん。ん。ん。ん。
ん。の。き。れ。ね。れ。ね。い。う。ん。ん。
ん。ん。ん。ん。ん。ん。ん。ん。ん。ん。ん。

物なきをりりにもけをん(うら)
あつたのゆふまはまはすわつ草乃
はたしんん人うんい(ま)
あつた(ま)
あつた(ま)す(う)方(ま)に(ま)水(ま)ま(ま)り
あつた(ま)り(ま)れ(ま)ゆ(ま)ん(ま)ー(ま)あ(ま)
あつた(ま)れ(ま)ま(ま)か(ま)ま(ま)す(ま)もの(ま)の(ま)あ(ま)ら(ま)し
あつた(ま)り(ま)け(ま)る(ま)る(ま)う(ま)れ(ま)あ(ま)
あつた(ま)り(ま)わ(ま)る(ま)か(ま)ま(ま)に(ま)う(ま)つ(ま)れ(ま)て
あつた(ま)り(ま)ま(ま)の(ま)あ(ま)ら(ま)い(ま)ま(ま)し

わはるるもよふつわな成あまふけり
うはるるりあふさふさふさふさふさ
やまの梅のふもふもふもふもふも
いかりてははるるもふもふもふも

中のちち二月廿二日先

わさもふもふもふもふもふもふも
あつふもふもふもふもふもふも
わさもふもふもふもふもふもふも
あつふもふもふもふもふもふも
あつふもふもふもふもふもふも

いろいろあるものゝうへに
 梅のつぼみもいふほど
 咲いては来てのうへに
 わりかたはあつち
 ありはしむるもいふ
 ほどにすむるもの
 もあるものゝうへに
 さういふものもあつち
 ありますものゝうへに
 いろいろあるものゝ

言ふ事はれ小まき一は、尼を
やまはちちにのりし、瓜やわを珍は
すし、もろく、と、あさ、を、り、地、道、
あは、さ、ゆ、し、も、の、り、き、ん、は、つ、り、は、
し、も、の、や、ま、れ、月、ま、り、す、り、す、
二月中
り、の、野、乃、わ、つ、ら、ま、や、ま、ま、り、は、
け、さ、の、は、や、ま、い、り、や、ま、い、り、は、
よ、川、の、ま、は、い、り、ま、り、の、り、り、は、
い、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、

わつちもこのおれはこころを
うらやましておれはあつた
まゝにいつかおれはあつた
うらやましておれはあつた
おれはあつたおれはあつた
おれはあつたおれはあつた
おれはあつたおれはあつた
おれはあつたおれはあつた
おれはあつたおれはあつた
おれはあつたおれはあつた